

教員
養成

支援センター

だより

第34号

2023年10月10日発行

編集・発行 名桜大学教員養成支援センター

所在地 沖縄県名護市字為又1220-1

「地理的な見方・考え方」とは

本学では2023年度から「地理歴史」の教員免許（高等学校教諭一種免許状）の取得が可能になりましたが、その前年の2022年は高等学校の地理歴史教育にとって画期といえる年でもありました。それは2018年3月告示（2022年度実施）の高等学校学習指導要領の地理歴史科において、「地理総合」と「歴史総合」が標準単位数2単位の必修修科目として新たに設置されたからです。

地理歴史科は1994年度から世界史、日本史、地理にそれぞれ標準単位数2単位のA科目と4単位のB科目が設置され、「世界史A」または「世界史B」が必修修科目となっていました。しかし、時間軸と空間軸にもとづく相互補完的な科目設置の必要性が高まり、必修修科目「地理総合」と「歴史総合」、それに選択科目として「地理探究」、「日本史探究」、「世界史探究」が新設されました。この背景には、近年のESD（持続可能な開発のための教育）の広がりやグローバルな社会経済システムのさらなる進捗といった現代社会の変化に対応できる人材育成の一環として、先の時間／空間軸にもとづいた学習基軸の創出が強く求められたことがありました。地理歴史科の中でも、とくに地理の必修修科目化は約半世紀ぶりのことで、そこからは現代における地理への期待をみることができます。

新設科目のうち「地理総合」は、「社会的事象の地理的な見方・考え方」を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力」を育成することを目標とし（下線は引用者）、具体的な授業テーマとして世界の生活文化の多様性、防災、地域や地球的課題への取り組みの理解などが構想されています。その中で、下線の「地理的な見方・考え方」は地理学独自の観点（学問的アイデンティティ）といえますが、そもそ

も地理的な見方・考え方とはどのようなものなのでしょうか。

今回の改訂でも踏襲された2009年改訂の学習指導要領では「『地理的な見方』の基本」を以下のように記しています。すなわち、「どこに、どのようなものが、どのように広がっているのか、諸事象を位置や空間的な広がりとかかわりでとらえ、地理的事象として見いだすこと。また、そうした地理的事象にはどのような空間的な規則性や傾向性がみられるのか、地理的事象を距離や空間的な位置に留意してとらえること」。また「『地理的な考え方』の基本」については、「そうした地理的事象がなぜそこでどのようにみられるのか、また、なぜそのように分布したり移り変わったりするのか、地理的事象やその空間的な配置、秩序などを成り立たせている背景や要因を、地域という枠組みの中で、地域の環境条件や他地域との結び付きなどと人間の営みとの関わりに着目して追究し、とらえること」としています。

これらの点を筆者なりに簡単にまとめると、「地理的な見方・考え方」とは地域差／地域性に注目し、その要因を立地条件や人間活動との関わりから考えていくことといえます。そして、この「地理的な見方・考え方」を通して社会の多様性やグローバル化する国際社会への理解を深めることが「地理総合」の目標となります。

昨年からはじまった「地理総合」と「歴史総合」の必修修科目化が示しているように、地理歴史科は複雑化した現代社会の中で大きな期待を寄せられている科目のひとつです。本学において今後地理歴史の教員免許取得を志望する学生が増えることを望みます。

国際学部国際観光産業学科 上級准教授
卯田 卓矢

～教育・養護実習生の声～



国際学群 語学教育専攻 4年次

親川 妃奈子 (おやかわ ひなこ)

教育実習校：名護市立屋部中学校（英語）

私は三週間、母校である屋部中学校で教育実習をさせていただきました。

実践授業では、生徒の集中力は時間との問題ということに気づいたので、英語の文法を活かしたアクティビティを取り入れ生徒が積極的に活動できる授業作りに力を入れました。また、説明や指示を簡潔にすることや声の抑揚、さらに視覚から情報を得られるために動作を大きくする等に

も心掛けました。生徒からは、「先生の授業分かりやすい」と言ってもらえてとても嬉しくやりがいを感じました。

放課後は、運動会に向けた活動に参加しました。そこでは、生徒一人一人の頑張りや生徒同士の関係性、日常生活に関すること等、授業の中では見えない生徒の姿もあり、授業以外での生徒との関わりは、生徒と教師の信頼関係を築いていく上でとても大切なことだと感じました。

母校での実習は素晴らしい先生方や生徒に恵まれ、私自身成長することができた三週間でした。実習を受け入れてくれたことへの感謝を忘れずに、この実習で得た経験を今後も生かしてきたいと思います。

国際学群 情報システムズ専攻 4年次

金城 七樹 (きんじょう かずき)

教育実習校：沖縄県立コザ高等学校（情報）

母校での教育実習だったため、生徒だった時の視点と、教職を学んできた実習生としての視点の違いを実感しました。

まず、教師の役割や授業研究について改めて考えさせられました。生徒観などに合わせた指導の工夫が必要です。特に、私が情報の授業を担当した高校1年生は、大学入試科目に「情報Ⅰ」が導入される世代です。そのため、生徒たちの受験勉強を考慮した授業作りが必要であると学びま

した。

教育現場の忙しさも強く感じました。授業計画、生徒の進捗把握、評価などに加えて、校務分掌も含めた多岐にわたる業務をこなす必要があります。その中で生徒とのコミュニケーション、ニーズや問題に対応するスキルも求められます。教員自身も継続的な学びと改善が必要だと再確認することが出来ました。学校とは、先生も生徒たちと一緒に学んでいく場所なのだと感じました。

教育実習はとても価値のある経験で、驚きや学びの連続でした。情報科教員を目指す身として、この経験から得た知識やスキルを活かして、これからも学んでいきたいと思っています。

人間健康学部 スポーツ健康学科 4年次

富川 優斗 (とみかわ ゆうと)

教育実習校：宜野座村立宜野座中学校（保健体育）

私は6月5～30日の期間、宜野座村立宜野座中学校で教育実習を行わせていただきました。実習先が母校でないことから、最初は校内の教室の場所や学校のルールを把握することが難しかったですが、宜野座中学校の先生方に優しく教えて頂き3週間の実習を無事やり切ることができました。

実習期間には、糸満の平和祈念公園に平和学習に行くな

ど授業以外にも校外学習の引率の方法なども学ぶことができました。その他にも、日常の学校生活を通して、生徒との関係づくりの重要性、授業の準備の大切さ、現場ならではのトラブルへの対応方法などを知ることができ、これから先教員になった時に役に立ついい経験ができたのではないかなと思っています。

実習最終日には、実習期間の授業や生徒と接しているときの写真をまとめた冊子を校長先生から頂くことができ、記憶にも記録にも残る教育実習になりました。

人間健康学部 スポーツ健康学科 4年次

伊藤 樹里 (いとう じゅり)

教育実習校：名護市立東江小学校（養護）

4週間の養護実習を通して、多くのことを学び、養護教諭として求められている資質・能力が何であるのか、自分に足りないことは何であるのか考えることもできました。養護実習の中で特に印象に残っていることは、研究授業と1日保健室経営です。研究授業では、指導教員や担任の先生のアドバイスやフォローにたくさん助けていただき、

養護教諭が行う授業において、担任の先生との密な打ち合わせが重要であることを知りました。1日保健室経営では、多くの児童が来室し、緊急性が低いが心的な要因が考えられる児童の対応もありました。そのため、指導教員から助言を求めることが多く、児童の抱える課題や特性について十分に理解したり、適切なところへ連携を呼び掛けたりするための知識が必要であると感じました。児童たちの言動や笑顔に元気をもらったり、教職員の皆さんが温かく接してくださったりしたお陰で、終始笑顔で充実した養護実習の日々を送ることができ、本当に感謝しています。